

「創造の人」を出品し、実力を認められた。

### 教室制

彫刻科塑造部は朝倉、北村兩教授の採用後直ちに教室制を実施した。これに関して次の文書が残っている。

彫刻科教官會議 大正十年五月十二日

出席者 大村幹事 鈴川教務主任及中川雇

高村、建島、水谷、朝倉、北村教授 関野助教授

### 記事

#### 一、教室志望ノ件

豫備科修了後直チニ教室ヲ志望セシム 研究生モ同様

右志望届ハ明後土曜日マデニ届出デシムルコト

#### 二、卒業製作ノ點數

各教室別ニ點數ヲ定メ教室毎ニ発表 官報掲載モ同様トス

ルカ イロハ順トスルカ 右更ニ研究ヲ要ス

#### 三、来土曜日午後一時ヨリ教員會議ヲ開キ教室配当并ニ標本室、

西洋画教室ヲ定ムルコト 其他諸般ノ打合ヲナスコト

右了リテ就任式并ニ生徒ヘノ論達ヲナス

伺〔大正十年五月十二日立案〕

自今彫刻科塑造部教室區分ヲ左ノ通り定メラレ来ル五月十六日ヨ

リ施行相成可然哉

### 記

建島教授受持教室

朝倉教授受持教室

北村教授受持教室

右教室ニ編入スル生徒豫備科修了後直チニ志望ヲ届出デシメ第一  
年級ヨリ之ヲ行フモノトス

建島、朝倉、北村らはともに本校彫刻科の写実主義アカデミズムの洗礼を受け、各自研鑽を続けて官展で活躍し、建島は穏和な趣きのある作風、朝倉は写実の技巧鮮かな作風、北村は男性裸体像を主とする豪壮な趣きの作風というように、三人三様の特色を示したが、生徒たちは各自その好むところによって教室を選んだようである。この大正十年の時点では建島は四十一才、朝倉は三十八才、北村は三十七才で、いずれも精力溢れ、また、互いのライバル意識も強かったようだ。北村西望著『百歳のかたつむり』（昭和五十八年、日本経済新聞社）の「美校教授時代」にはその辺の事情が如実に記されている。

#### ⑨ 塑造研究会

建島大夢、朝倉文夫、北村西望の若手三作家を迎えた彫刻科塑造部では自ずと生徒間にも活気が高まった。左記の文書にある塑造研究会もその証左の一つであろう。

#### 教室借用願

彫刻科塑造部生徒中夏期休暇ヲ利用シ塑造研究会開催ノ申出有之

候ニ付テハ我等三名理事者トナリ塑造教室借用ノ上別紙規約ニ依リ研究會開催致度此段相願候也

大正十年六月十五日

塑造研究會理事 建島弥一郎〔印〕

同 朝倉 文夫〔印〕

同 北村 西望〔印〕

東京美術學校長正木直彦殿

塑造研究會規約

第一、開閉 六月二十日開催 八月三十一日ニ終ル 但シ午前八

時ヨリ午後四時マデ(土曜ハ正午マデ日曜ハ休)

第二、使用教室 塑造部教室全部 但シ九教室

第三、監督 理事者時々出席ノ外中川萬次郎並ニ各教室ヨリ一名

ヅ、補佐セシム 但シ監督ハ火氣、掃除ハ勿論「モデル」ノ出退其他生徒ノ勤惰等ニ注意

第四、監督ノ事務ハ彫刻科教官室ヲ使用

第五、教室ニハ「ストープ」ヲ要セザル替リ火鉢一個宛ヲ借用ス

第六、「モデル」ノ休憩所ハ學校ノ「モデル」休憩所ヲ借用ス

第七、教室備付ケノ時計ハ其儘借用ス

第八、「モデル」費其他ノ諸入費ハ総テ生徒各自ニ支出ス

塑造研究會員名簿

加藤鬼頭太

大村安次郎

武井 直也

森 学

大塚 尚武

中島 東洋

山本金次郎

小笠原貞弘

児島 矩一

松田 尚之

安藤 照

堀江 尚之

林 謙三

土方 久功

安本 亮一

丸山 節

増澤 公平

松岡 正雄

加藤 忠雄

池亀 輝治

渡辺 弘行

有馬 純孝

山本 稚彦

帝展が近づくと、各教室で熱気あふれる制作が行われた。大正十一年八月二十四日の『国民新聞』は「ならずりと並んだ裸婦彫刻と、半裸体でそれぞれ制作に没頭している生徒たちの写った写真入りで朝倉教室の様子を次のように報じている。

大汗で裸婦の製作

……帝展の切迫に若い作家が大作に努力 モデルも粒揃ひ

美術學校彫刻部の朝倉教室

學校の中で夏休み廢止を眞先に去年から始めた上野の美術學校彫刻部の朝倉教室は今年も非常な酷暑と闘ひつゝ學業を勵んでゐたが帝展も近付いたので昨今炎暑の中で一層馬力を掛けて大作に努力してゐる、廿三日同校研究科と別科教室とを覗いて見ると入選圈内の作家連相川吳〔楽三か〕の兩氏が午後の日盛りに猿股一枚で流れる汗を事ともせず六尺もある裸婦を製作してゐる、教室の

中には其外に作りかけの腰掛けた女や立つた女の種々な像が美しい曲線の律音を漂はしてゐる、吳君は九大内科で稻田博士の後を承けて主任教授になつた吳博士の實弟だ、『製作してゐる時は暑い事も忘れてゐます、此別科では私共の外に清水彦太郎、荻島、松平榮之助、長谷川勝之、吉川保正の諸君が午前中製作してゐて午後から朝倉先生の工房でやつてゐます』と又相川君は『暑い時は百〇二度にもなりますが懸命にやつてゐるので却て放課後の方が苦しい位です』と、今年是一般に若い作家の製作が非常に多くモデルも間に合ひ兼てる程である、それから一大壯觀を呈してゐるのは研究室で寫眞の通り堀江尙志、久保田吉太郎、松田尙之、安藤照、泉谷喜一郎、小室達の諸秀才が何れも六尺に餘る裸婦を製作してゐるのである、此所は淺倉教授が衣物も袴も汗に濡れる程熱心な監督をしてゐる丈あつてモデルも肉體の匂やかな粒揃ひで従つて作も傑出してゐる。

#### ⑩ 曠原社

大正八年に朝倉文夫以下本校彫刻科卒業生たちが東台彫塑会を結成したことは第二卷(799〜801頁)に記したが、同十年十二月にはそれに反発する建昌大夢、北村西望その他が曠原社を結成した。彫刻科三教授のうち一人が東台彫塑会を、他の二人が曠原社を率いるかたちとなつたことは生徒間に波紋を呼び起こし、また、帝展審査において両派の軋轢が露骨に現れたりしたが、両派の対立は芸術上の主義主張の相違から生じたものではなく、組織の在り方に関する意見の相異から起こつたもので、どちらかと言えば勢力争いに近いも

のであつた。

この曠原社については、当事者の北村西望が次のように記してゐる。

#### 曠原社旗揚げ

建昌大夢君と私が帝展審査員にたつた大正八年の十一月である。

朝倉文夫君が、東京美術学校出身の新進彫刻家を集めて、「東台彫塑会」という団体を結成した。評議員が、朝倉君以下、藤川勇造、小倉右一郎、石川確治、吉田三郎、内藤伸の六人、会員が、日名子実三、関野聖雲ら十八人、会友が木内克ら五人で、参加者総勢三百五十人、実に大きな組織である。

この団体が、毎年展覧会を行い、私も建昌君も、これに参加することをすすめられた。しかし、どうも、この団体の在り方が納得いかず、入らなかつた。

この団体の中には、洋行帰りもいて、相当に勉強しているのがかなりそろつてゐる。しかし、帝展に出してゐない者も入つていて、そういうところが、なんとも承服し難い。特に帝展で活動している朝倉君が、帝展に背を向けてゐる者たちまで仲間にして展覧会を開くのは、帝展の分派行動のよう感じられて、「ああいうのは良くないね」と、建昌君と語り合つたものだ。

大正十年、私が母校教授になると、建昌君と相談して、私たちも運動を起こそうと計画を立て、十二月、「曠原社」という研究団体を発足させた。東台彫塑会が、評議員、会員、会友とものも